様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４１２

研究課題名（和文）18世紀後期の劇作品にみる市民家族像の政治性についての研究

研究課題名（英文）On the political aspects of the ideas of the bourgeois family in dramas of the late 18th century.

研究代表者
菅　利恵（Suga, Rie）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：５０５３４４９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して、近代的な家族像がドイツ語圏における政治意識の形成に際して果たした役割を明らかにすることができた。従来の研究においては、近代的な市民家族像の政治的な機能が、主に保守的な秩序維持の道具という点に見出されてきたが、本研究では、近代的な家族観が、「人間的なもの」の具体例という理想主義的な側面を併せ持っていたことに注目した。そして一見対立的に思われる両面を併せ持っていたことこそが、市民家族の理念を様々な政治的立場に結びつけていたことを論じ、シラーやヴィーラントの分析を通して、これがコスモポリタニズムやパトリオティズムの言説において重要な役割を果たしたことを示した。

研究成果の概要（英文）：Through this study, I clarified the role that a modern family image served in the process of formation of the political identity in the modernization of German-speaking countries. In the prevailing studies, the political function of a modern bourgeois family image is found in a role as a tool of conservative order maintenance. However, in this study, it is attempted to forcuss how it functioned as an expression of bourgeois ideals such as equality and humanity. The ideas of the bourgeois family had contradictory aspects, were incorporated into the various political attitudes. Through the Analysis of various works by Schiller and Wieland, it is shown that the ideas of the bourgeois family played an important role in the discourses of cosmopolitanism and patriotism.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：レッシング　レンツ　シラー　ヴィーラント　コスモポリタニズム　パトリオティズム　ナショナリズム　啓蒙時代

１．研究開始当初の背景

ドイツ語圏 18 世紀後半の市民知識層の言説の中では、封建的な秩序関係に対抗しながら「自由と平等」に集約される市民的な理念を打ち出し、これを道徳書や文学作品などの「文芸公共圏」（ハーバーマス）において広めることが試みられた。その際、情愛の重視と家父長的な基本構造に特徴づけられる近代的な家族観が、市民知識層のアイデンティティ形成に決定的な役割を果たしたことは、ハーバーマスの『公共性の構造転換』(1962/1990、邦訳 1994)以来 18 世紀研究の基本理解となってきた。しかし、では私的領域をめぐる新しい観念が、市民知識層の政治的な自意識の形成過程において具体的にどのような役割を果たしたのか、という点については、いまだ研究が不十分であった。本研究は、このような研究状況をふまえて、家族や恋愛を描いた文学作品の中に市民知識層の政治的アイデンティティの形成過程を探った。

２．研究の目的

18 世紀後半のドイツ語圏においては、政治的共同体に主体的に関わろうとする市民知識層の言説にはコスモポリタニズムとパトリオティズムという二つの方向性が見られた。啓蒙時代を通して基本的にコスモポリタニズムの傾向が強かったが、1800 年前後の対ナポレオン戦争を経てパトリオティズムが強められ、「国民」としてのアイデンティティ形成が加速したとされている。（Echternkamp: Der Aufstieg des deutschen Nationalismus 1770-1840, 1998 など参照。）従来の文学研究においては、文学上の家族の表象をこうした政治的意識の変容過程と絡めて論じる試みがほとんどなされてこなかった。社会史的な観点から家庭劇の家族表象を扱った研究でも、政治思想史的背景との関わりについては踏み込んで論じられていない。歴史研究においては、国民意識の形成過程に迫る試みが活発に進められてきたが、そこでは近代家族というテーマへの関心が抜け落ちている。国民意識の形成過程における近代家族像の役割に注目した Mosse の『ナショナリズムとセクシュアリティ』(1985、邦訳 1996)においても、18 世紀に関する考察は手薄であった。よって本研究では、市民知識層の家族観念が、彼らの政治的自意識の形成においてどのように機能したのかを、18 世紀後半における様々な家庭劇の分析を通して、具体的に示すことを目指した。私的な愛の関係性のはらむ政治性がこの時代の文学テクストを媒体としていかに展開し、またテクスト自体をいかに規定したのかについて探り、それを通して、近代的な家族像がドイツ語圏における政治意識の形成に際して果たした役割を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

啓蒙時代において、「自由」や「平等」といった市民的な社会思想の核心部分は、「人間的なもの」というキーワードで語られた。市民知識層の政治的な自意識形成がコスモポリタニズムとパトリオティズムの両面に置いて展開した際にも、両者の基盤はともに啓蒙主義的な「人間的なもの」の理念であった。本研究では、次の３つの課題を設定し、市民的な家族像が「人間的なもの」を表象する媒体として位置づけられたことを具体的に示した上で、「人間的なもの」としての市民的な家族表象が、コスモポリタニズムとパトリオティズムの展開においてどのように機能していたのかを分析した。

課題１：近代的な家族観と政治的理想主義の関係性の解明
課題２：18 世紀後期における政治意識の変動と近代的な家族観の関係性の解明（１）
～フランス革命後の政治的家庭劇
課題３：18 世紀後期における政治意識の変動と近代的な家族観の関係性の解明（２）
～フリードリヒ・シラーと C.M. ヴィーラント

４．研究成果

（１）個々の課題についての成果

①課題１：近代的な家族観と政治的理想主義の関係性の解明

家庭劇においては、父親の権威よりも相互の愛を強調する近代的な市民家族が好んで描かれ、この家族が、実現されるべき「人間的な」共同体そのものの核心を内包させた空間として強調されている。本研究では、レッシングの『エミーリア・ガロッティ』(1772) や『賢者ナータン』(1779)、またシラーの『ドン・カルロス』(1787) などに注目して、それらにおいて親密な家庭領域が「人間的なもの」の培養土として、またそれ自体の表現として強調されていることを論じた。それを通して、政治的な主体像を理想主義的に構築しようとする市民知識層の試みにおいて、感傷的な家族像が決定的な役割を果たしたことを裏付けた。

②課題２：18 世紀後期における政治意識の変動と近代的な家族観の関係性の解明（１）

フランス革命以降の思想史的な変動を、コスモポリタニズムとパトリオティズムのせめぎあいを軸に跡づけた。Albrecht による詳細な先行研究（Kosmopolitismus, 2005）を参照しつつ、ヴィーラントやシューバルト、またゲッティンゲン・ハイン同盟の詩人たちの言説など、当時のコスモポリタニズムとパトリオティズム双方の言説を幅広く検討した。とりわけ両者の重なりや違いを明確にすることに力点を置いた。啓蒙時代においては、コスモポリタニズムもパトリオティズムもともに「自由」や「人間的なもの」を希求す

る自意識の受け皿となっており、その点で両者は重なっていたことを示した上で、個人と集団の関係性をどう捉えるかという点において、両者が決定的に異なっていたことを明らかにした。さらに、フランス革命後にパトリオティズムが急速に高められた時代状況において親密領域をめぐる表象がどのように機能したのか、という観点から、フランス革命後の家庭劇を分析した。フランス革命の後は、ラディカルな革命劇としての家庭劇も発表された一方で、反革命を打ち出す保守的な家庭劇や歴史劇が数多く現れた。本研究ではこの時期の政治的な家庭劇を代表する作品として、イフラントの『帽章』(1791)を分析し、そこで「人間的なもの」という市民的な理想主義が、体制批判、あるいは体制擁護のレトリックにどのように組み込まれているのかを明らかにした。

③課題３：18 世紀後期における政治意識の変動と近代的な家族観の関係性の解明（２）

フランス革命後にパトリオティズムが急速に高められた時に親密領域をめぐる表象がどのように機能したのか、という問題を、シラーやヴィーラントの作品分析を通してさらに深く追求した。彼らの作品において、家族を後楯にした「人間的な」政治主体の像が、コスモポリタニズムとパトリオティズムという具体的な政治的立場とどのようにつなげられているかを探った。

まず、コスモポリタニズムとパトリオティズムのせめぎあいが独自の形で表れている例として、1800 年前後に書かれたシラーの劇作品に注目した。同時代における政治的変動をめぐるシラーの言説を検討し、それがコスモポリタニズムとパトリオティズムの狭間で揺れ動いていたさまを確認した上で、『オルレアンの処女』(1803) や『ヴィルヘルム・テル』(1804) などの劇作品を分析し、そこで「人間的なもの」を中核に据えた市民家族の観念こそがせめぎあう両者の結節点として機能していることを論証した。次に、ヴィーラントの長編小説『アリスティッポス』(1801)に注目し、ヴィーラントのコスモポリタニズムにおいて親密領域の観念が決定的に重要な役割を果たしていることを明らかにした。

（２）研究全体の成果

本研究では、近代的な家族観が、保守的な秩序維持という側面とともに、「人間的なもの」の具体例という理想主義的な側面を併せ持っていたことに注目した。そして様々な作品の分析を通して、一見対立的に思われる両面を併せ持っていたことこそが、市民家族の理念を様々な政治的立場に結びつけていたことを明らかにした。さらに、愛の領域としての市民家族が、「人間的なもの」という観念を媒介にしてコスモポリタニズムともパトリオティズムとも結びつき、市民的な政治主体のあり方やあるべき政治的共同体を構想する際に核となる役割を担ったことを示した。それによって、近代化の過程における市民家族像の政治的な機能を新たに提示しなおすことができた。

また、レッシングやシラー、ヴィーラントらの作品を、コスモポリタニズムやパトリオティズムとのつながりに注目して分析することによって、それらの同時代的な意義を新しく示すこともできた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

① 菅利恵：レッシングにおける愛と正義 ：『エミーリア・ガロッティ』から『賢者ナータン』へ、ドイツ文学、査読有、14(2)、2016，24-40

② 菅利恵：18 世紀後期におけるコスモポリタニズム、希土、査読無、41、2016、58-83

〔学会発表〕（計　　２件）

① 菅利恵:親密さの政治学―ヴィーラント『アリスティッポス』における愛とコスモポリタニズム、日本独文学会 2017 年春季研究発表会

② Rie Suga：Contingency and Fiction: On Goethe’s Wilhelm Meisters Lehrjahre 2015 年 07 月 31 日 14th INTERNATIONAL CONGRESS FOR EIGHTEENTH CENTURY STUDIES（国際学会）

〔図書〕（計　　１件）

① 菅利恵：「愛の時代」のドイツ文学、彩流社、2018、300 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
菅　利恵　(SUGA, Rie)
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：50534492

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)